

◆◆◆ 第9回国際空中生物学会に参加して

第9回国際空中生物学会が、本年8月23日から27日（現地時間）、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで開催され、筆者は日本における花粉計測や予測について発表を行いました。

空中生物学とは、飛散花粉の研究を中心に、カビなど細菌類の孢子などの飛散を扱う学問です。そのような学会であることからアレルギーを専門とする医者や生物学者、気象学者等、非常に学際的な学会でもあります。学会会場は、市の中心部から地下鉄で5駅10分程度のところにある国立自然科学博物館（写真）で開催されました。博物館内の定員100人程度のレクチャールーム2部屋が発表会場にあてられており、オーラルとポスター発表で100件ほどの発表が行われました。それほどメジャーな学会ではないことから参加者数は150人程度で規模は極めて小さかったのですが、その分、お互い知り合い同士といったアットホームな学会でした。

会議での主たるテーマは「花粉計測ネットワーク」、「花粉飛散予測」及び「花粉情報と健康影響」であり、筆者の発表はそのうち「花粉情報と健康影響」のセッションにおいて、我が国の環境省が採用している代表的な自動花粉計測機器（KH-3000、KP-1500）について紹介するとともに、その利用方法として時間単位の花粉飛散予測について言及しました。特に欧米においては、自動花粉計測機器が日本ほどには普及していないため、多くの反響が寄せられ、持参した技術資料20部は瞬く間に持ち去られるほどでした。



一方、ヨーロッパでは花粉粒子よりも花粉に付着して飛散するアレルゲンの直接測定が行われており、アレルゲンの時間的な変動の方が、花粉数の推移よりも花粉症患者の症状とよく一致するという報告が行われました。しかしながら、アレルゲンの直接測定は非常に手間や設備負担が大きいという理由から、日本では分析技術—ヨーロッパにおける直接計測技術は日本から移転されたらしい—はあっても、実現の目途すらたっていないのが現状です。

予測モデルについても多くの発表がありましたが、そのなかでは、北欧が最も進んでいるという印象を受けました。諸外国における花粉症はイネ科やシラカバで、これらは人工林と異なり、林分面積や放出花粉数、開花等の現象論的なプロセスである発生源把握が困難であることから、予測精度向上の妨げになっていることがわかりました。我が国の主たる花粉症がスギ、ヒノキ科であり、これらは人工林として管理されており、林野庁や（独）森林総合研究所によって上記の発生源情報が整備されていることから、諸外国に比較すると予測モデルの構築にあたっては非常に優位な立場にあることが確認できました。

ところで、2012年8月下旬には国際花粉学会・国際古植物学会が東京において開催される予定です。諸外国からの、空中花粉や花粉分析など花粉について幅広い分野からの参加を期待したいところです。

（財団法人気象業務支援センター専任主任技師 鈴木基雄）